

# 子どもの感情の状態に関するチェックリスト (他者評定フォーム) の開発 — 広汎性発達障害のある児童への適用と信頼性・妥当性の検討 —

Construction of an Emotional State Checklist for Children  
— Applying to Children with Pervasive Developmental Disorders  
and Exploring Reliability and Validity —

岡田 智<sup>1)</sup> 奥貫奈津恵<sup>2)</sup> 岡田克己<sup>3)</sup>

Satoshi OKADA and Natsue OKUNUKI and Katsumi OKADA

## 1. 問題の所在と目的

現在、教育や児童青年医学の領域では、ソーシャルスキルトレーニング (SST) に焦点が当たるようになってきており、実践的知見から支援プログラムやアセスメント方法が開発されてきた (上野・岡田、2006; 岡田・三浦ら、2009など)。SSTは、子どもが社会的行動を獲得したり、遂行したりできるように支援を行うものであるが、この遂行及び獲得がスムーズに行われるかどうかは、情動喚起や感情のコントロールなどに関する情緒面の問題が大きく関わっていることが従来から指摘されている (Gresham & Elliott, 1984)。例えば、松尾・新井 (1997) は、子どもが社会的行動を選択する際に、その状況で起きる感情が影響していることを示した。また、相川 (2000) はソーシャルスキルの生起過程モデルを提示しているが、その中においても、「感情の統制」を主要なプロセスと位置づけている。このように、ソーシャルスキルを遂行する際には、感情の問題の影響はしばしばトピックになっており、児童臨床では、この側面へのアセスメントの必要性が重

要視されている。

さて、近年、教育や児童精神医学などの領域では、特別支援教育の展開や発達障害者支援法の施行などの社会的動向も受けて、広汎性発達障害などの発達障害への支援や治療により焦点が当たるようになってきた。広汎性発達障害 (以下PDD) における特徴として社会性の障害があり、これまで多くの研究の中で、自己および他者の感情認知、感情理解の困難さが取り上げられている。言語機能が良好とされるPDDの子どもにおいても、基本的感情の認知や感情語の使用に困難をもつことが示されている。代表的な研究では、宮本 (1999, 2000) は高機能広汎性発達障害者と対象とした研究で、感情を喚起する状況刺激と矛盾する表情を予測する能力の困難さ、また状況と表情から感情推測のための情報を統合することが困難であることを明らかにしたことがある。また、神尾・十一 (1998) も、高機能自閉症を対象に表情写真に対して言語をラベリングする課題での困難さを明らかにした。その他様々な困難さが明らかになるに伴い、またそれに対するアプローチ法 (例えば、高階ら、2003等) も開発され、特に

1) 家政学部児童学科 2) 千葉リハビリテーションセンター 3) 左近山第一小学校

他者の感情認知に関する検討が多くなされてきている。

しかし、臨床場面ではアトウッド (1999) が指摘するように、自己の感情表現や自己の感情認知の障害があるケースや、感情のコントロールに問題があるゆえに社会適応上の問題を生じるケースが散見されている。また、山下 (2008) によると、PDDにおいてうつ病の並存が高率で、抑うつ気分、興味の喪失等の症状が確認されている。にもかかわらず、他者の感情認知に関する研究が多く発展してきている一方で、自己の感情認知に特化したアプローチ法は未だ数少ない。また、アプローチとして取り上げる課題は、感情語の理解 (宮崎ら、2007)、表情の弁別 (宮下、1988)、状況刺激文における情緒状態の理解 (奥田ら、1999)、感情体験時の身体反応のモニタリング (アトウッド、2004)、感情の程度の測度化 (アトウッド、1999) など、多岐にわたり混在している状況である。それゆえ、感情理解の一側面のみが達成されたにとどまり、包括的な感情理解が促進されるに至らないケースが生じることが懸念される。よって、今後は対象児の障害特性に応じた感情認知支援アプローチの開発が、PDDの子どもへのアプローチにおける重要な課題としてあげられる。

岡田 (2003) は、発達障害のある子どもへ SST を効果的に行うために、社会的コンピテンスの視点 (Ford、1996) から、「skills」「motivation」「biology」「Respondent Environment」の4つの側面のアセスメントを強調し、指導のためのソーシャルスキル尺度の開発を試みた。現在、「skills」以外にも、「biology」「Respondent Environment」に関しては、障害特性をチェックする医学的診断基準や脳機能を知的・認知能力から測定する知能検査などアセスメントツールに関しては十分な蓄積がなされている。しかし、「Motivation」、つまり情緒面や感情面に関するアセスメントは、言語や認知能力が発達途上にある子どもの場合、従来の投影法や描画法、自己評定の質問紙法などでは、

信頼性や妥当性に欠けることは否めない。特別支援教育が展開され、子どもの困難や特性に応じた支援が重要視されている中、感情面のアセスメント方法については、臨床実践に適用できる実用的なツールが必要であるといえる。

そこで、本研究では、教師評定用の感情の状態に関するチェックリストを開発すること、信頼性、妥当性の検討を行うことを目的とする。

## 2. 方法

### 1) 尺度作成

筆者ら (PDDの評価、指導を専門とする臨床心理士、小学校教員) により、学童期および思春期 (小学生、中学生) の子どもに頻繁に見られる感情の問題を中心に、「感情の表現」「感情の統制」「感情の安定性」の3カテゴリーおよび、12項目が作成された。この尺度に関しては、筆者らの他に、子どもの心理臨床を専門とする臨床心理士1名、情緒障害教育経験10年程度になる小学校教諭1名にも、PDDの子どもが示しやすい感情の問題として妥当であるか、一般の教員がつけやすい内容であるかどうか意見をもらい、項目に修正を加えた。最終的に、資料の項目になった。

評定は、それぞれの項目について「まったく当てはまらない (1点)」「あまり当てはまらない (2点)」「当てはまる (3点)」「とてもよく当てはまる (4点)」の4件法でおこなう。なお、点数に関しては、「感情の表現」のみを逆転項目として扱い、結果集計には「1点→4点」「2点→3点」「3点→2点」「4点→1点」と振替えた。

### 2) 調査方法と分析方法

対象児は、神奈川県横浜市立小学校の通級指導教室に通っており、発達障害を専門とする児童精神科医によるPDDの診断のある児童である。通級指導教室を通して、在籍学級の担任教師に対象児の評定を依頼した。評定は無記名で行い、チェック項目以外に学年、性別も記載し

てもらった。依頼、回収は手渡しでおこない、計44名のデータが集まった。性別の内訳は男児29名、女児15名であった。学年は、1年生10名、2年生8名、3年生11名、4年生8名、5年生4名、6年生3名であった。

分析方法は、信頼性を確認するためにCronbachの $\alpha$ 係数、構成概念妥当性を確認するために因子分析をおこなった。分析には、SPSS12.0の統計ソフトを用いた。

### 3. 結果と考察

#### 1) 記述統計

44名の広汎性発達障害のデータが収集された。記述統計は、表1の通りである。性差、学年差を検討するために、各下位尺度の合成得点を算出し、学年と性別で分散分析をおこなったが、「感情の表現」「感情の統制」「感情の安定性」いずれにおいても、性差、学年差はみられなかった。

表1 記述統計 (N=44)

	平均値	S D
項目1	2.6	0.8
項目2	1.8	0.6
項目3	2.7	0.9
項目4	2.4	0.9
項目5	2.6	0.8
項目6	2.6	1.0
項目7	2.6	1.0
項目8	2.7	0.9
項目9	2.4	0.9
項目10	2.4	0.9
項目11	2.2	0.9
項目12	1.8	0.9
感情の表現	9.5	2.6
感情の統制	10.5	3.0
感情の安定性	8.8	2.9

\* 「感情の表現」「感情の統制」「感情の安定性」は、各項目の得点を合計したものである。

#### 2) 因子分析

44名のデータの12項目について因子分析を行った(表2)。初期の固有値の減衰率を見ると、4.7、2.4、1.3、0.8、0.6...であり、回転後の因子負荷量の状態からも3因子構造が妥当であると判断した。「感情の表現」の項目に関しては、第3因子に高い負荷がみられた。第3因子と他の因子との相関関係も低いものであった。「感情の統制」の項目に関しては第2因子にどの項目も高い負荷量を示したが、第1因子にもまたがって負荷した。「感情の統制」の項目に関しては、第1因子に高い負荷量を示したが、やはり、第2因子にも負荷が認められた。第1因子と第2因子は、.495と中程度の相関関係がみられており、互いに密接であることが示された。いずれにせよ、「感情の表現」「感情の統制」「感情の安定性」の下位尺度構造を裏付けるものであり、構成概念妥当性が認められた。

表2 下位尺度の $\alpha$ 係数、因子分析結果  
(プロマック法 斜交回転)

	因子1	因子2	因子3	$\alpha$
【感情の表出】				
項目1	.273	.214	.730	.798
項目2	.160	-.277	.460	
項目3	.232	.109	.921	
項目4	.173	.250	.737	
【感情の統制】				
項目5	.588	.680	.402	.830
項目6	.435	.761	.239	
項目7	.349	.785	.149	
項目8	.622	.680	.082	
【感情の安定性】				
項目9	.924	.491	.218	.816
項目10	.700	.178	.386	
項目11	.684	.593	.060	
項目12	.616	.562	-.012	

### 3) $\alpha$ 係数

各下位尺度の  $\alpha$  係数を算出したところ、感情の表現が .798、感情の統制が .830、感情の安定性が .816であり、どれも満足のいく結果が得られた。内的整合性の高さが確認された(表2)。

### 4. 総合考察

本研究では、教師用定用の感情の状態に関するチェックリストを開発し、信頼性、妥当性の検討を行った。構成概念妥当性を確認するために因子分析をおこなったところ、「感情の安定性」「感情のコントロール」「感情の表現」の3つの下位尺度で成り立つことが確認された。また、 $\alpha$  係数による信頼性も確かめられた。以上のことから、本尺度はPDDの感情の問題を評価するツールとしての活用が期待された。ただし、今回の分析ではPDDを持つ子どもを母集団にしており、他の発達障害や発達障害のない子どもたちにおいて調査はしていない。よって、今後は、PDD以外の者を対象にした調査、尺度の統計分析が必要となるだろう。

また、アセスメント尺度には、信頼性や妥当性だけでなく、実践で活用しやすく有益な情報が得られるかといった実用性も必要とされる。臨床適用を図り、事例研究を通して、本尺度の活用についても、検討しなければならない。事例研究に関しては、筆者らの研究グループで、投稿準備中であるが、児童臨床の分野においては、感情面のアセスメントに関する実践研究が更に展開されることが望まれる。

加えて、本研究では尺度構成を検討するにあたり、情動、情緒、感情、気分、それぞれの概念を区別していない。また、多くの研究者が一時的情動の形態(状態)と、安定した個別的情動の形態(特性)とを区別することが重要であることを指摘しているが(ジンバルドー、1983)、本尺度では状態か特性かという区別についても適用していない。なぜなら子どもは情緒が未分化であり、性格形成のプロセス上にあるので、そのような区分には限界があると考えられるか

らである。筆者らは、臨床的知見から、感情の状態を表す構成概念を「表出」「統制」「安定性」の3つとして捉えたが、今後更に構成概念についても吟味していく必要があるだろう。

### 【文献】

- 相川充(2000)：人づきあいの技術－社会的スキルの心理学－，サイエンス社。
- Attwood, T(2004)：Exploring Feelings－Cognitive Behavior Therapy To Manage Anxiety－，Future Horizons。
- アトウッド、T(1999)：ガイドブック アスペルガー症候群，東京書籍。
- Ford, E. M.(1996)：Motivational opportunities and Obstacles. Motivational opportunities and obstacles associated with social responsibility and caring behavior in school contexts. In J. Juvonen & K. R. Wentze(Eds) Social Motivation understanding children's school adjustment. New York；Cambridge University Press.
- Gresham, F. M., & Elliott, S. N.(1984)：Assessment and classification of children's social skills: A Review of methods and issues. *School Psychology Review*, 13, 292-301.
- 神尾陽子・十一元三(1998)：高機能自閉症における感情認知過程に関する研究，児童青年精神医学とその近接領域39, 340-351.
- 松尾直樹・新井邦二郎(1997)：感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響，教育心理学研究，45, 303-311.
- 宮本淳(1999)：高機能広汎性発達障害の感情認知(Ⅱ)－状況と矛盾する表情理解と推測についての検討－，小児の精神と神経39, 239-247.
- 宮本淳(2000)：高機能広汎性発達障害の感情認知(Ⅰ)－他者感情推測における手かり情報を統合することの困難さ－，発

- 達障害研究22, 34-43.
- 宮下照子(1988)：自閉症児における顔刺激の弁別学習。心理学研究59(4), 206-212.
- 宮崎眞・桜川亜紀(2007)：高機能自閉症児における感情語理解および表出の指導(1)。岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 第6号, 183-194.
- 岡田智(2003)：指導のためのソーシャル・スキル尺度作成の試み—社会的コンピテンスの視点からのLD児支援—, LD研究—研究と実践—, 12, 56-63.
- 岡田智・三浦勝夫・渡辺圭太郎・伊藤久美・上山雅久(2009)：特別支援教育ソーシャルスキル実践集—支援の具体策93—, 明治図書.
- 奥田健次・井上雅彦・山本淳一(1999)：発達障害児における文章理解の指導—情緒状態の原因を推論する行動の獲得—, 行動療法研究25, 7-22.
- P.G.ジンバルド(著)・古畑和孝・平井久(監訳)(1983)：ジンバルド—現代心理学II.サイエンス社, 404.
- 高階美和・犬飼陽子・井上雅彦(2006)：高機能自閉症幼児における感情理解・表出の指導—日常生活への般化の検討—, 発達心理臨床研究12, 113-122.
- 上野一彦・岡田智(2006)：特別支援教育[実践] ソーシャルスキルマニュアル, 明治図書.
- 山下洋(2008)：広汎性発達障害に併存するうつ病の診断と治療。児童青年精神医学とその近接領域49, 138-148.

#### 【謝辞】

本研究に協力してくださいました東京都および横浜市の通級指導の先生方、また、本プログラムに参加してくださいました子どもたち、その保護者に感謝いたします。また、この研究の一部は、明治安田生命こころの健康財団の2008年度研究助成を受けて行いました。

資料

感情の状態に関するチェックリスト (他者評価フォーム)				
児童氏名 (	)	学年 (	年生)	評価日 (
評価者 (	)	児童との関係 (	在籍担任・通級担当・保護者・その他:	)

- \* このチェックリストは、児童の感情に関する困難を特定し、支援ニーズを明らかにするためのものです。
- \* 最近のお子さんについて、チェック項目ごとに基準に従って評価してください。

まったく  
 あてはまらない  
 あまり  
 あてはまらない  
 あてはまる  
 とても多い  
 あてはまる

【感情の表現】

・ 自分の気持ちを大人に落ち着いて話すことができる。	1	2	3	4
・ 嬉しい気持ち、楽しい気持ちを態度や表情に表す。	1	2	3	4
・ 困ったときや不安なとき、大人や仲間に相談できる。	1	2	3	4
・ 作文や発表などで、自分の感じたことを表現できる。	1	2	3	4

【感情の統制】

・ 気持ちのコントロールが難しい。	1	2	3	4
・ 嫌なことがあったとき、固まったり大騒ぎしたりする。	1	2	3	4
・ 怒ったりイライラしたりすると、他者や自分を責めたり攻撃したりする。	1	2	3	4
・ 気持ちの切り替えに時間がかかる。	1	2	3	4

【情緒の安定性】

・ 気持ちが不安定になりがちである。	1	2	3	4
・ 不安感や無気力感など見られる。	1	2	3	4
・ 気分のムラが激しい。	1	2	3	4
・ 過去のことを思い出して混乱するときがある。(フラッシュバックを含む)	1	2	3	4

【情緒の安定性】

上記項目やそれ以外について、お子さんの感情や情緒に関することがあればお書きください。
--